

「脱出記」の記憶 —シベリアの強制—

尾形 芳秀

2000年の頃だろうか、定年となって漸くかつて住んだ樺太のことを思い出すようになっていた。所用でロンドンのセント・ジェームズ・パーク・ホテルに滞在していたとき、ふと立ち寄った書店で「The Long Walk」という本が偶然目についた。ポーランド人のスラヴォミール・ラウイツ(Sławomir Rawicz)という人が自分の体験記を書いたものだ。その本を手にしたとき一枚の地図にくぎ付けとなった。それにはシベリアからインド(ダージリンあたり)までの逃走ルートが書かれていた。シベリアから生きて脱出できるものだろうか、と半信半疑だった。内容もよく理解できずに滞在記念にと購入してきた。その後、目次や英国の書評程度は読んでいたが、樺太で実際にあったことが走馬灯のように思い浮かべられた。

1940年前後だと思うが、樺太の首都豊原で、ヨーロッパから来たという名も知らぬ女性が数人滞在していた。喫茶店で働きながら誰かを待っていたようである。しかし、この女性たちのことは当時の人々は誰も詳しいことは知らない。ソ連と国境を接する島である。きっと北サハリンから脱走か亡命してくる人を待っているのではないかと人々は噂をしていた。数年が経過して彼女たちのことは私たちの視線から消え話題にもならなくなった。

私は2000年頃、戦前・戦後を知る豊原の人々の集まりで、このことを話題にしたことがある。しかし、誰も詳しいことは知らない様子だった。ところが、その中の一人と思われる女性について消息の手が

りがみつかった。その女性たちはシベリアに抑留されていた最愛の人が脱走したとの噂を聞きつけ、もしかしたら地理的に樺太へ脱走したのではないかと考えて確証もないのにじっと待っていたというのである。

彼女たちの一人は、その後どのような経緯からか不明であるが、樺太通信局の英語教師をやっていたという。そして、通信局職員と結婚したという。きっと待っていたのは恋人だったのかもしれない。しかし、待ち人は樺太に現れることはなかった。他のヨーロッパの女性たちも同じような理由から極東の地で最愛の人を待っていたのであろう。

私はこの樺太の出来事と符合するところがあり、関心をもってこの本のことを思い出したのである。その後日本でも翻訳が出版された。それは「脱出記-シベリアからインドまで歩いた男たち」と改題されていた。シベリア脱走は、樺太ではなく何とインドへの前人未踏の脱出劇だったのである。私は樺太で待ちわびていた女性たちの思いと重ね合わせて、脱出劇は真実の物語だったことを知った。

現在では映画も制作されている。何故かタイトルも「The Way Back」となっていた。アメリカから取り寄せて何度も見たが、2012年末には日本でも発売された。ぜひ、翻訳された本をご覧いただきたいと思う。吹雪のシベリアを脱出し成功した数少ないドキュメンタリーである。



(おがた・よしひで)

「幽玄の情景」 — 賀茂 —

選と文=ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)

生の欲求は矢の如し。私の心の中で加速し、天の雷鳴の如く轟いて、消えていく。稻妻が落ちた場所に水が湧き、広い川となって流れ出す。これが賀茂川。時に澄み、時に濁る。ああ、私の心も同じ。時に澄みわたり、時に混乱する。ひとつの場所、ひとつの森にふたつの神の姿が見えるのはなぜ？あり得ないほど驚異的なこと。稻妻は何故に泉に射られたのか。神の意図は知る由もない。

瀬見の小河の清ければ。
瀬見の小河の清ければ。
月も流を尋ねてぞ。
澄むも濁るも同じ江の。
浅からぬ心もて。何疑いのあるべき。



上記は前駐日ポーランド共和国大使ロドヴィッチ女史による連載(2013年1月~12月号掲載予定)
「家庭画報」編集部への許可を得て転載



「幽玄の情景」

選と文＝ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)



ロドヴィッチ前大使
2012.5.29 氏間撮影

— 関寺小町 — 七月

七夕の 織る糸竹の 手向草

まだ夏なのに秋風が吹き、もう秋が来たのかと心が騒ぐ。失ったものはあるけれど、あなたと共に過ごした日々はここに結びつけておきたい。今宵は魔法の七日の夜。月明かりの下、野原で踊ろう。愛の言葉を綴ろう。思い出が和歌という糸に言葉を紡ぐ。

老女の心のなんと美しいことか。この世界のように年を重ねても、いまだ少女のように魅了され、恋をして、風の中を舞っているではないか。けれど、秋風のように、老いの風は吹き始めている。何かを失ったのだ、永遠に。この能を観るとそう感じずにはられない。

— 氷室 — 八月

深井の氷に閉ぢ付けらるるを 引き放し浮び出でたる氷室の神風 あら寒や 冷やかや

真夏の酷暑の頃、山の中の暗い秘密の場所。森の真ん中に、永遠の水が、静かな氷の岩に姿を変えて。

白い？いえ、残り火のような暗赤色。水を清め、夏の暑さでまいった身体を生き返らせる。陰から二人の神が現れ、冷気を吐く。お喋りをやめて、足を止めて、静かにご覧なさい。丹波の山奥から八百万の神が出てくるかも。

— 三井寺 — 九月

秋も半ばの暮れ待ちて 秋も半ばの暮れ待ちて 月に心や急ぐらん

秋の夜の三井寺は月と強く輝く愛の場所。ああ、懐かしい三井寺。また訪ねて、あの鐘の音を聞かなくては。秋月のように澄んだ鐘の音で満たされたい。

これは永遠の母の愛。正気を失った心は満月のように輝き、大声で我が子を呼ぶ。狂気に生かされる我ら。狂わんばかりに愛さねば。この世から消える前に。



前駐日ポーランド共和国大使
ロドヴィッチ女史による「家庭画報」の連載。
2013年1月～12月号掲載予定です。
「家庭画報」編集部のご転載許可をいただきました。
(右から7月号、8月号、9月号の本誌の表紙)





「幽玄の情景」

選と文＝ヤドヴィガ・ロドヴィッチ (能楽研究家)

— 井筒 — 十月

眺めは四方の秋の空
松の声のみ聞ゆれども
嵐はいつくとも定めなき世の夢心

ようやく秋が訪れ、古刹の上に静かに月が現れる。深い井戸の水面に映る小さな光はなに？そこに立つは男か女か？静寂の中、動いている。ふたつの月がみつめあう。夜空の月と、水面の月。ひとつは空高く身動きもせず、ひとつははるか水中で揺らめいて。暗い夜のふたつの光は共にあらねばならない。かつて共に揺らめいた男女が、いまはもういない。情熱も愛も、消えて、なくなった。井戸に映るひかりだけが舞っている。

ああ、井筒。生命の本質のような序之舞といい、何度見ても見飽きない。

— 龍田 — 十一月

紅葉の水に散り浮きて
綿を張れる如くなれば
渡らば綿中や絶えなんとなり

秋の女神は何処に？龍田に。

山は女神の身体。川は女神の血流。赤いモミジの葉、錦のように豪華な山の紅葉。落ち葉が川を埋め尽くし、肌のように広がっている。

水に浮かぶ落ち葉の上を歩けるだろうか？女神の身体を踏みつけることができるだろうか？ああ、命が秋の葉に血のように撒き散らされ、龍田の山を登っていく。太陽の下で、女神の水を飲みながら。靴を脱いで、水とモミジの葉に触れてごらん。中に入ってごらん。

— 葛城 — 十二月

天の香具山も向かひに見えたり
月白く雪白く
いずれも白砂の景色なれども

冬がきて、雪が降る。寒気と静寂が訪れる。葛城(つたかざら)に縛られたかの如く、陰に潜む人がある。雪も、月も、老女の髪も白い。神秘に包まれた美、隠れた顔。枯れ木のように朽ちた身体が、鼓動を打つ心臓にしがみつく。



ロドヴィッチ前駐日ポーランド共和国大使による「家庭画報」の連載(2013年1月～12月号)を編集部の許可をえて改変し転載。

(写真左上から時計回りに) 10月号、11月号、12月号の同誌の表紙、ロドヴィッチ＝チェホフスカ前大使(右)と編者(左)。ピウスツキ胸像除幕式レセプション会場で再会。

2013.10.19、白老ポロコタンにて。

氏間多伊子(うじま・たいこ)